



『青春の門』という作品のタイトルを聞いたことのある人はどのくらいいるだろうか？ ドラマや映画なら知っている、という人もいるかもしれない。そう、現在第七部まで刊行されているこの『青春の門』シリーズは、青春文学の王道として幾度も映像化を果たしてきているのである。映像化されたものの多くは第一部『筑豊篇』であるが、あえてここでは第二部『自立篇』を紹介したい（もちろん『筑豊篇』も読み応えのある作品なので、興味があれば一度読んでみることを強くお勧めする）。

時は昭和二十年代後半。大学へと進学するため、主人公・伊吹信介は単身、故郷・筑豊を旅立ち、東京へと向かった。東京には到着したものの住む所も決めていなかったため、大学構内で野宿をしようと試みるが警備員に追い出されてしまう。その翌日、大学前で靴磨きをしていた演劇青年・緒方と出会い、信介は彼の下宿先へ転がり込む。彼の導きによって、信介は東京を、人間を知り、自分の進むべき道を模索し始めるのだった……。

ここまで読まれた方はすでにお気づきかもしれないが、今回この『自立篇』を紹介した理由のひとつは、大学生活が描かれている、ということである。昭和二十年代という戦争の面影がまだ色濃く残る時代において、主人公は一体どのような大学生活を送ったのか。そこには、現代の私たちとは異なる点が多く見受けられる反面、若者だけが特権的に持っていると言ってもいい‘熱さ’は、今も昔も変わらないのかもしれない、と感じさせるものがある。

そして、作品を一貫して放たれる「青春とは何か」というメッセージ。物語の中で描かれているのは、フィクションとはいえ、ある一人の人間がどう生きたか、というひとつの生々しい記録である。青春の喜怒哀楽のすべてが、本当に生々しく描かれている。読み進めるうち、青春とは、その字面から想起されるような良い側面だけを指すのでは決してなく、それとは裏表の関係で存在する人生の苦難や絶望、挫折といった負の経験を初めてする時期であると気づかされる。

今の大学生活に迷いが生じている人、そして何より、今、大学生になったという解放感を噛み締めているであろう新入生諸君に、ぜひ一度この本を、そして願わくはシリーズを通して、読んでいただきたいと思う。（鏡）



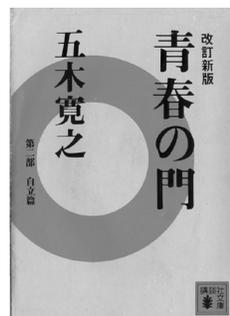
## 第二部

## 「自立篇」

# 青春の門

五木寛之

講談社



### 五木寛之氏とは？

この『青春の門』シリーズをはじめとする小説はもちろん、『大河の一滴』などのエッセイも執筆している作家。1981年から一時執筆を休止し、龍谷大学で仏教史を学んだこともあり、京都とも縁の深い人物である。



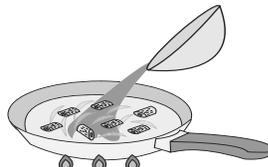
下宿をしているとお金に困ることがよくあります。少しでもお金を節約したいときにはちくわ！ 今回は安いちくわを使って、手軽に作れるどんぶりものを紹介します。（onion）

**材料（1人分）**

ちくわ（斜切）	2本
卵	1個
玉葱（薄切）	1/4個
醤油	大さじ1.5杯
みりん	大さじ1.5杯
水	50ml
ごはん	どんぶり1杯
のり・細葱	お好みの量
油	少量



①適当な容器に卵を入れてよく混ぜ、それから醤油、みりん、水を加えてさらに混ぜる。



②フライパンに油をひき、玉葱とちくわを2分ほど炒める。そこに①を入れ、好みの固さになったら火を止める。



③完成した②をごはんにのせ、のりと細葱をまぶして、できあがり！ その他お好みでトッピングをどうぞ！

はみだし  
すてーじ

そんなバカな?! あれはアリなのか?!  
⇒小さめのGかもしれませんよ。

（工・2 匿名）  
（ホイホイにはひっかかる? ; 編）